

[学 会]

東京女子医大8外科合同カンファレンス抄録

日時 昭和53年2月10日(金) P.M. 5:30より

会場 消化器病センターカンファレンスルーム(2階)

1. 大腸隆起性病変の検討

(第二病院外科) 遠藤 久人

最近、わが国における食生活の西欧化にともない、大腸癌の頻度は、年々、増加の傾向にあり、それにともない大腸早期癌の診断に多くの関心が寄せられている。胃早期癌は、陥凹性、IIc 様病変が多いのに比し、大腸早期癌は、大部分が隆起性病変である。そこで、大腸隆起性病変の検討は、意義を有するものと考え、当教室における、過去5年間の大腸隆起性病変の検討をおこなった。症例は、40症例で、57個のポリープであり、solitary tubular adenoma 15個、大腸早期癌6個、癌と合併したポリープ19個であつた。今回、炎症性ポリープは除外している。年齢的にみると40代後半に多く、大きさでみると5~10mm 48個で大半を示し、10mm 以下で、悪性のポリープ3個があることは、10mm 以内のポリープも十二分注意して、診断、治療に当る必要性を考えさせられる。ポリープの大腸分布をみると、従来の報告と同様に、直腸、S字状結腸に分布するものが大半であつた。しかし過去3年間は、手術標本、ロマノスコープからの検討であり、過去2年間は、微細病変を検討すべく注腸レ線を施行し、更に、全大腸を観察出来る大腸ファイバースコープの導入により、ポリープの発見率も高くなつた。今後、ポリープの分布状態も多少なりとも変化して来るものと思われる。大腸早期癌6例は、m が1例、SH 5例で、内視鏡的切除されたもの3例、開腹手術例3例であり、リンパ節転移は無かつた。SM 癌2例が、内視鏡的切除され、根治性に問題はあつたが、十分に follow up していきたいと考える。SM 癌については、現在開腹腸切除するのが、妥当と考えられている。今後更に、大腸早期癌の発見されにともない、治療法も確立されて来るであろう。

2. 急性汎発性腹膜炎における腹腔内大量洗滌法(特

に超音波腹腔内洗浄法について)

(外科)

岡崎 武臣・木村 恒人・倉光 秀磨・
太田八重子・織畑 秀夫

急性汎発性腹膜炎は、救急外科疾患のなかでも極めて重篤なるものの一つである。

当教室では、昭和43年より昭和52年までの10年間に198例の急性汎発性腹膜炎を経験した。10年間の死亡例は35例(死亡率18%)であるが、この10年間の前半と後半の5年単位で区切ると、前半は死亡率35.9%であるのに比して、後半は死亡率7%とこの疾患の治療成績は大幅に向上している。治療成績向上の原因として、救急医療体制の充実による患者の早期来院、手術法、術前術後の管理、中心静脈栄養等があげられるが、なかでも手術時の腹腔内大量洗浄は腹腔内に散布された種々の汚染物質および細菌、細菌毒などの希釈減少ないしは除去が可能で、この疾患の予後の向上に大きな役目をはたしていると考えられる。最近われわれは腹腔内大量洗浄装置を作成し、汎発性腹膜炎開腹時に約10,000mlの生理的食塩水で腹腔内洗浄を行ない好結果を得た。即ち、この装置を使用することにより、洗浄時間は平均16~18分で、従来の方法と較べ短時間で洗浄が可能であつた。また、腹腔内洗浄効果向上のため、腹腔内超音波洗浄装置を試作し、周波数58kHz、出力40wの治療域内に強度を固定し、実験犬に糞便による腹膜炎を起こさせ、生理的食塩水500mlにて3回腹腔内洗浄を行ない、対照群と5分間超音波洗浄群とで、菌数減少率の算定をした。その結果超音波洗浄群に有効との結果を得たので、臨床7例の汎発性腹膜炎に使用し、生理食塩水のみによる洗浄群7例と比較し、細菌減少率で、超音波洗浄群が有効との結果を得たので報告した。

3. 死体腎移植の経験